

---

# 星のクジラ

雨澤エミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星のクジラ

### 【Nコード】

N3764Z

### 【作者名】

雨澤エミ

### 【あらすじ】

い  
小さな村に住む、僕とトオルが体験した、ちょっと不思議な出会い

人生には、これを言ったら、怒るだろうなとか、悲しむだろうなとか、そういう言葉を言わなきゃいけない時もある。そんな大きなことじゃなかったって、そういう場面が幾つもあったって、それでもやっぱり、勇気が出なくて言うのを躊躇う。かといって言わないでよくと、ますます気まずいことになる。

今の僕みたいに。

「なあ今年の祭さ、カエデが選ばれたのかよ」  
さらりと、トオルに言われた。

僕は、すごくビックリしてしばらく声がでなかった。

「それ、どこで聴いたの…?」

「ああ、さつき学年主任に言われたんだよ。『宮下、残念だったなあ』とかなんとかって、うっせえの」

大宮先生か。僕はあの先生の、巨大な熊のような体と笑顔が張り付いた顔を思い出す。確かにあの先生なら言い兼ねない。親切で言っている言葉が地雷を踏んでいることに気がつかない、やつかいなタイプの人だ。

「それで、どうなんだよ」

トオルは、僕に鋭い眼光を投げつける。

僕は、少し気後れして「うん」と言う事だけで精一杯だった。

「そうか」

「あ、トオル。ごめんね、黙ってるつもりじゃなかったんだけど。なかなか言い出せなくてさ」

カエデは、しばらく黙ったままカエデは喋ろうとしない。

やばい、めっちゃめっちゃ気まずい。

「いや、怒ってねえよ」

あまりの沈黙のあと、聴こえてきた言葉にはあまり説得力がなか

った。

「ほ、ほんとに？」

「しつげえな、本当だよ」

黙っていたことにプラスして、トオルは祭に選ばれることを楽しみにしていた（まあ、それが黙っていた理由でもあるんだけど）。

そう簡単に腹の虫が収まるとは思えない。

びくびくとトオルの方を伺う。

そんな僕をちらりと見て、トオルはにやりと笑みを浮かべた。

あれ、なんだかとてもイヤな予感がする。

その笑みには見覚えがあった。

面白いイタズラを思いついた時の顔だ。

僕が初めてその顔を見たのは、小学一年の夏休み前のことだ。学校にも慣れて来て、つい遊び過ぎて帰宅が遅くなった僕たちは、学校で怖いと言われている先生に見つかり、案の定こっぴどく叱られ、とぼとぼと帰り道を歩いていた。

二人共、押し黙ったまま田んぼの中を歩いていた。

昼過ぎの日差しが、じりじりと首の後ろを照らし、首が熱くなっていたのを覚えている。

「きょうは、おどろいたよね」

重々しい空気を変えようと、僕は口を開いた。今思えば「ただ怒られただけ」それだけのことだったけど、小学一年生だった僕たちには、それだけでもショックな出来事だった。少なくとも僕にとっては。

「…さねえ」

しばらく黙ったまま後ろを付いて来ていたトオルが、ぼそりと呟いた。

「はい？」

「ゆるさなねえ、あいつ」

「…えつと」

僕は、この時まで、トオルは反省してしおらしく黙っているのだと思っていたんだ。

「びつくりさせてやるんだよ。みてるよ、ぜったいぎゃふんといわせてやる」

今時、ぎゃふんなんて言葉、あんまり聴かないよな、と思いつつ覗き込んだトオルの顔には、ニヤリとした笑顔が浮かんでいた。

イタズラ作戦自体は、「大量のカエルを捕まえて先生の前で離す」

とかそんな、どうしようも無いもので（しかも、カエルを探すのに飽きたトオルに、僕は沼に落とされた）。作戦自体も結局失敗に終わった。

トオルとは、この分校に入ってから仲良くなった訳だけれども、この時初めて「トオル」という人間を理解した気がする。

他にも、小学3年生の時には鉄棒は歩けるんだぜと同じ顔をして笑っていた。案の定、滑り落ちて大けがをして。先生を呼びに行つた僕が何故か一番、こっぴどく怒られた。

とにかく後先考えず、感情だけで突つ走る奴なんだ。

だから、今回も悪い予感しかしなかつた訳なんだ。

「え、勝負…?」

帰路には、いつもの田んぼ道が広がっている。

辺りを見回すと、本当に何も無い村だなんて思う。僕の家までは、3キロぐらい。僕の家以外何もないような山の中だ。途中に、トオルの家を含んだ集落がある。それから、数百メートル行ったところに小さな駄菓子屋があつて、たまに2人で寄り道したりする。

それ以外は、特になんの遊び場もない。遊ぶことと言ったら、山の中で虫を採ったり、空き地で、みんなで鬼ごっこしたりだ。

あとは、高学年になってからは、五時ぐらいまでは学校の遊具で放課後遊べるようになる。大きくなるってことは、できることが増えるってことなのだ、なんてちよつとだけ思った。

「そう、俺とお前で、勝負して勝った方が祭に出られるってのど  
うだ」

どうだ、と言われましても。

「…でもさ、もう決まったことなんだよ。それに祭の掟にも『選ばれたら、謹んで受けるべし』って書いてあるし、断るなんて…」

「なんだよ力エデ。『トオルに出て欲しい。応援しているから』  
って言ってくれたのは嘘だった訳」

「…そ、それはさあ」

痛いところをつかれた。僕は、元々祭りに出るとか、そういうことは苦手なんだ。どう考えてもそういうことに向いているのは、トオルで。それは周りの大人たちだって分かってるはずだ、なんて甘く考えていた。

きつと大人たちが考えていたのは、逆のことなんだろうなって思う。

多分それは、トオルだって分かってるんだ。それでも納得できない。

「つーかさ、1回だけの祭の選出だけ。お互いにしこりが無いように、戦って勝ち取るもんだろ。まあ、もし俺が勝ったらお前が病気で寝込めばいいさ」

「なにを言ってるんだよ」

しこりがないように、大人たちが選出しているはずなんだけれどね。何を言っても今は通じないだろうな。

それに、今なら分かるんだ。トオルの気持ち。苦手だとはいえ、あの役に選ばれた時すごく嬉しかった。心のどこかで誇らしい気持ちにもなった。ずっと、それに憧れてたのなら尚更、そう思うんだろうなって。

だから、巻き込まれようと思った。

「それで、なんの勝負をするの？」

「き、も、だ、め、し」

トオルは、楽しそうに笑う。

ああ、でもやっぱりロクなことになりそうにない。



僕たちの住んでいる、星川村には、毎年秋に、村北部にある山に登った先にある星の湖に神輿を担いで行き、星の祠に供物を捧げて湖の水神に祈りを捧げる祭がある。山をひとつ登ることや、夜から祭を始めることから、村の成人しか参加を許されていない。

だから、村の子供たちは、その日学校に集まって宿泊訓練をすることになっている。

それはそれで楽しいのだけれど、小学6年生になると別の役目を与えられる。毎年、一人だけ神輿の上に乗る、祠の神様へ捧げられる人身御供の「役」を与えられるのだ。つまり、その日、選ばれた子だけは大人と共に祭に参加できるのだ。これは小学6年生だけに与えられた任務な訳だけれど、たまに例外がある。その年に小学6年生がいない場合だ。その場合、繰り上がって5年生が任に当たる場合がある。(5年生が居ない場合は中学一年に回ってくる)

どちらにしろ、毎年1人にしか与えられない貴重な役だ。

僕たちの代は、上にも下にも子供は居て、しかも同じ歳の子供は僕とトオル二人だけだった。だから、小学校入学してから急速に仲良くなつた訳だけど、それと同時に、お互いをライバルとして無意識にも意識していたんだろうなと思う。

僕だって、言葉ではトオルを応援しているって言うておきながら、そういうことなんか苦手なんだって思いながら選ばれたってやっぱり思っていた。

それは歴代の役の人たちがかっこ良かったから。ただ、衣装を着て、神輿の上に座るだけなのに、とてもかっこ良く映った。

それは、彼らがというより、神輿と彼らが着る衣装にデザインされている鯨神がとも雄大で神秘的だったからかもしれない。

そう、なぜか星の祠が祭っている水神は鯨だった。

「遅えよ」

待ち合わせ場所に到着すると、トオルが外灯から少し離れた一本木にもたれかかっていた。村の数少ない灯りの下には夏は過ぎたとは言え、まだ多くの虫たちがたむろっている。

暗くて表情が見えないが、遅くなったこと怒っているのだろうか。「ごめん、おじいちゃんに捕まっちゃって」

あの後、帰りが遅くなった僕は、案の定おじいちゃんに咎められた。

「また、説教されたのかよ。その後、どうやって出て来たんだよ？」

くつくつと笑う声が聴こえる。

「それは、反省して眠ったフリして窓からこっそりと」

「でもまあ、いいじいちゃんだよなあ」

「まあね……」

「ウチなんて余裕で、夜出られるよな」

「仕事なんでしょ、仕方ないよ」

「ん？今更気にしてねえよ。自由にできてラッキーってとこだ。早く行こうぜ、朝になっちまう」

なんて、そんなことを言うトオルの顔が寂しそうに見えるのは、気のせいだよな、きっと。

僕たちが、待ち合わせした場所は、三叉路になっていて、北西に行くと、僕が今降りて来た道。僕の家があり、南へ行くと、楓の家がある集落に続く。

そして、北西に向かう道。ちょうど、その道をまっすぐに行くと星の湖着く。ただ、その道は、細く。木はうっそうと茂っている。

「肝試しには、持ってこいだなっ！」

「…というかさあ、競う二人で肝試しって意味くない？」

「いいじゃん、細けえことはさ。とりあえず一緒に行つて先に湖のほこらにタッチした方が勝ちな。見えるまでは仲良く行こうぜ」

「案外、怖がりだよな」

「ちよつとだけ、可愛い。」

「さあ、何の話だ」

「…な、なんでもない」

満面の笑みで、首を絞められた。

いや、やっぱ可愛くない。

「あのさあ」

湖まであと、半分ぐらいまで来ただろうか。

低いところにあつた月が、少しずつ高く登ってきている。

秋の夜風が、少しだけ鼻につんと来る。ジャンパーを羽織って来てよかつたな。

「なに、トオル。どうしたの」

先をいくトオルが、ふらふらと動くのに連動してライトの光がゆらゆらと地面を照らす。

「あー、いや。これから湖に行く訳だけだよ。いい加減暇だよなあつておもつて」

「また、飽きたの？」

「イヤダナーカエデクン。マタトカ、ヒトギキガワルイ」

「なんで片言なんだよ。君が飽きっぽいのは、周知の事実でしょ」

まあな、と今度はライトを空に向けてチカチカと当てている。

「危ないから、ちゃんと歩きなよ」

そうトオルに注意しながらも空を見上げると、落ちそうな程の星たちが今日も空の上にはあつた。

「不思議だよなあ。これ都会行ったら全然見えないんだぜ。母ちゃん言つてた。街には灯りが溢れてて。夜でも明るいんだつてさ。

本当は、そこにあるはずのもんが見えないってどんな感じなんだろうな」

そう言いながら、トオルは空を見上げて先を歩く。

たまに、すぐくたまにだけど大人に見える時がある。トオルの両親は早くに離婚していて、お母さんが女手ひとつで育てて来た。生活の為に、仕事で街まで行き家を開けることが多くて、小学校に入学してからは、一人で留守番をしていることが多かったと思う。

うちも小さいころに父親を亡くして母が出稼ぎに街まで行くような家系だったけど、じいちゃんが居たから1人の寂しさっていうのはあまりよく分からない。

トオルの寂しさも、想像はできるけど体感はできない。

寂しくないの、と聴くと「慣れたから」って毎回言うから最近あまり聴かなくなった。

「そういやさ」

いきなりトオルが振り返る。

「な、なに？」

「なに驚いてんだよ」

「いや、別に」

トオルは訝しげにこっちを見る。

「おかしな奴だよな、お前」

いや、それは君に言われたくない。

「それで、なに？」

「これから、二人で星の湖に行く訳じゃん。で、思い出したんだけど昔二人で、お前ん家のじいちゃんから説教されたけど、あの説教で湖のでんせつ？の話してたよな？」

記憶を軽く巡らせる。

確かに、そんなことがあったような。トオルと一緒に居ると色々な人に怒られるからよく覚えてはいない。むしろ、うちの祖父は説教の度にその伝説の話をする。

『祖先は、こんなに偉大だった。お前もその血を引いてるんだ。』

歴史に名を残せる人間になれ』

いつも最終的にはそうなる。

ちなみに今日の説教もそれで終わった。

小さい頃は、うちの祖先はスバラシイ人なんだって有り難く聴いていたけれどずっと聴いているうちに、耳にたこ状態になってありがたみも何も無くなってしまった。

「それってさ、カエデ覚えてんの？」

「もちろん、覚えてるよ」

「暇だしさあ、もっかい教えるよ」

だから、なんで上からなんだよ。

まあ、僕も暇だから、いいけどね。



「それは、数百年前のことじゃ  
じいちゃんの説教の伝説の話は、いつもそこから始まる。  
数百年まだ、この村に湖はなかった。

水源のない村は、毎年雨乞いの祭りをする程水に飢えていた。今の祭りの基本形態はその時に始まったと言われている。（もちろん色々な説がある内のひとつだ）

それは星が落ちるように降っていた夜のこと。  
真っ赤に、不安定に揺らぐ星のかけらがひとつ、村の高台に落ちたという。

しばらくすると、大きなくぼみを作ったその場所から、とことと水が溢れてくるようになった。村人たちは、これは天ノ恵みと、その水の溢れる場所に星の湖と名付け、水路を作り村の水不足は解消され、祭りも一時期やらなくなったそうだ。

それで、めでたしめでたし、そうなるはずだった。

「違うのか？」

トオルは、訊く。

遠くには、湖から流れる水の音がする。

「うん。しばらく経って湖に遊びに行った子供たちが帰ってこないってことが起き始めたんだ」

必然的に子供たちを湖に近づけさせなくなったし、村の人たちも「祟り」だ、「神隠し」だと言って水をあまり使わなくなってしまった。

これでは、いけない。と思った村長は、当時村で一番力の強い青年を湖の視察に向わせた。



「なるほど、それがカエデの祖先だな」

嬉々として僕を振り返る。

「そうなんだけど、ちよっと静かに聴けないの？」

「人の話くらい好きに聴かせろよ」

なんか、もついいや。

その青年の名前は、アキトと言った。

## 間章

アキトは、湖のほとりの木に、腰を下ろしていた。村長に言われて来たは良いが、さてどうしたものか。目の前の湖は、静かにあるだけだった。

「どうしたら、いいんだろう」

勇んできたものの、なにをしたらいいのか分からない。

村長の言葉を思い出す。

『良いか、アキトあそこにはきつと何かしらの怪物がいる筈なんじゃ。子供たちが帰らんのもそやつが関係しておるはず。お前が行って倒して来い』

（めっちゃキラキラした顔、していたなあ…）

ちよつと楽しんでいるのだろう。村長から渡された村に伝わる剣を見る。そんなことを言われて黙ってもらって来たが、そんな大それたものではないのは知っている。

村長が普段、武術の練習に使っているものだ。

まあ、家には代々伝わっているのかも知れないが。

普段何もない村だ。子供たちが行方不明というだけで騒ぎが多くなる。

とりあえず、何をするのか、だ。

アキトは立ち上がると思い切り息を吸い込み言った。

「おーい、湖の主よ。居るのか居たら姿を現せ」

大きな声は、湖面に吸い込まれた。

やはり、無理があるのか。アキトはキョロキョロと辺りを見回し使えるものはないかと、探した。

しかし、あるものと言えば木々や、丸太ばかり。石でも投げれば何か起こるだろうかと拾い上げ、ひょいと湖面に向かって投げた。

と、同時に湖面の真ん中が浮き上がり何か、とても大きな何か  
が目の前に現れた。そして、投げた石がそいつに当たった。

「…やつべえ」

とつさに口に出た言葉だが、結構その場に合っている言葉である  
と思う。

「なんだ、呼ばれたと思って出て来たら痛いではないか」  
ゾクリとした。

とても雄大で地面を伝って響いてくるようなそんな声だった。  
ヒトではない。ヒトがこんなに大きい筈はない。

見た目は大きくヒレがある。

しかし、魚でもない。魚もこんなに大きい筈はないし、なにより  
喋らない。

「お主は…なんなのだ…」

アキトは腰を抜かしていた。その生物は、その様を見て「にやり」  
と笑い言った。

「私かい？クジラ…いや、化けクジラ…とても言われていたかし  
らね。気軽にミラ姉さんとも呼んでくれていいわよ」

「…は？」

それは、誰も知ることのないアキトと化けクジラ、ミラとの「出  
会い」だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3764z/>

---

星のクジラ

2012年1月6日18時54分発行